

【D年】聖霊降臨節第5主日(2024年6月16日)

【旧約聖書日課】ミカ書 4章1〜7節

1 終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち
どの峰よりも高くそびえる。

もろもろの民は大河のようにそこに向かい

2 多くの国々が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。

主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから

御言葉はエルサレムから出る。

3 主は多くの民の争いを裁き

はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦うことを学ばない。

4 人はそれぞれ自分のぶどうの木の下

いちじくの木の下に座り

脅かすものは何もないと

万軍の主の口が語られた。

5 どの民もおのおの、自分の神の名によって歩む。

我々は、どこしえに

我らの神、主の御名によって歩む。

6 その日が来れば、と主は言われる。

わたしは足の萎えた者を集め

追いやられた者を呼び寄せる。

わたしは彼らを災いに遭わせた。

7 しかし、わたしは足の萎えた者を

残りの民としていたわり

遠く連れ去られた者を強い国とする。

シオンの山で、今よりどこしえに

主が彼らの上に王となられる。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 12章18〜29節

18-19あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の聲に、近づいたではありません。20彼らは、「たとえ獣でも、山に触れば、石を投げつけて殺さなければならぬ」という命令に耐えられなかったのです。21また、その様子があまりにも恐ろしいものだったので、モーセすら、「わたしはおびえ、震えている」と言ったほどです。22しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、23天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、24新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。

25あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。もし、地上で神の御旨を告げる人を拒む者たちが、罰を逃れられなかったとするなら、天から御旨を告げる方に背を向けるわたしたちは、なおさらそうではありませんか。26あときは、その御声が地を揺り動かしましたが、今は次のように約束しておられます。「わたしはもう一度、地だけではなく天をも揺り動

かそう。」27この「もう一度」は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、造られたものとして取り除かれることを示しています。28このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、畏れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。29実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 4章5〜26節

5それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に來られた。6そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

7サマリアの女が水をくみに來た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。9すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。10イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」11女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」13イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに來なくてもいいように、その水をください。」

16イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで來なさい」と言われると、17女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。18あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」19女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。20わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」21イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。22あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から來るからだ。23しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。24神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならぬ。」25女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが來られることは知っています。その方が來られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」26イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ミカ書 4章1〜7節

1 終わりの日に

主の家の山は、山々の頭として堅く立ち
どの峰よりも高くそびえる。
そして、もろもろの民が川の流れるように
そこに向かい

2 多くの国々が来て言う。

「さあ、主の山、ヤコブの神の家に登ろう。
主はその道を私たちに示してください。
私たちはその道を歩もう」と。
教えはシオンから

主の言葉はエルサレムから出るからだ。

3 主は多くの民の間を裁き

遠く離れた強い国々のためにも判決を下される。
彼らはその剣を鋤に
その槍を鎌に打ち直す。
国は国に向かって剣を上げず
もはや戦いを学ぶことはない。

4 人はそれぞれ自らのぶどうの木

いちじくの木の下に座り
脅かす者は誰もいないと
万軍の主の口が語られる。

5 どの民もおのおの、自らの神の名によって歩む。

私たちは私たちの神、主の名によって
とこしえに歩む。

6 その日には、私は足の萎えた者を集め

追いやられた者
私が災いに遭わせた者を呼び集める——主の仰せ。

7 私は足の萎えた者を残りの者とし

遠くに連れ去られた者を一つの強い国民とする。
主はシオンの山で、今より、とこしえに
彼らの王となられる。

へブライ人への手紙 12章18〜29節

18あなたがたは、手で触れることができるものや、燃える火、雷雲、暗闇、暴風、19ラッパの音、また、人々がこれ以上耳にしたくないような大声の言葉に、到達したのではありません。20彼らは、「たとえ獣でも、この山に触れば、石で打ち殺されなければならない」という命令に耐えられなかったのです。21また、その光景があまりにも恐ろしかったので、モーセは、「私は恐れ、震えている」と言いました。22-23しかし、あなたがたが到達したのは、シオンの山と生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たち、天に登録されている長子たちの大集会、すなわち教会、すべての人の審判者である神、完全な者とされた正しい人たちの霊、24新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血より優れたことを語る注がれた血です。

25語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。もし、地上で御旨を告げる人を拒んだ者たちが、罰を免れなかったとすれば、天から御旨を告げる方に背を向ける私たちは、なおさらそうではありませんか。26あのときは、その御声が地を揺り動かしましたが、今はこう約束しておられます。「もう一度、私は地だけではなく天をも揺り動かす。」27この「もう一度」という言

葉は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、造られたものとして取り除かれることを示しています。28このように、私たちは揺るがされない御国を受けているのですから、感謝しましょう。感謝しつつ、恐れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていきましょう。29実に、私たちの神は、焼き尽くす火です。

ヨハネによる福音書 4章5〜26節

5それで、イエスはヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。6そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

7サマリアの女が水を汲みに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。9すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女の私に、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際していなかったからである。10イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水をください』と言ったのが誰であるかを知っていたならば、あなたのほうから願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう。」11女は言った。「主よ、あなたは汲む物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生ける水を手にお入れになるのですか。12あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸を私たちに与え、彼自身も、その子どもや家畜も、この井戸から飲んだのです。」13イエスは答えて言われた。「この水を飲む者は誰でもまた渇く。14しかし、私が与える水を飲む者は決して渇かない。私が与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」15女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここに汲みに来なくてもいいように、その水をください。」

16イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、17女は答えて、「私には夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』というのは、もっともだ。18あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたの言ったことは本当だ。」19女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。20私どもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」21イエスは言われた。「女よ、私を信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。22あなたがたは知らないものを礼拝しているが、私たちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。23しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真実をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。24神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真実をもって礼拝しなければならぬ。」25女は言った。「私は、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られるとき、私たちに一切のことを知らせてくださいます。」26イエスは言われた。「あなたと話をしているこの私が、それである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・6月16日「聖霊降臨節第5主日」の日課主題は「天のエルサレム」。

・旧約聖書日課は、「ミカ書」から、終末預言が告げられる箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、キリスト者として生きる者に与えられる終末的な希望を告げる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、サマリアの女と主イエスとの対話を伝える逸話の箇所。

旧約日課(ミカ4章より)

・「ミカ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第四卷「十二小預言者」の6番目に置かれた預言文書。本書の標題(1:1)によると、「ミカ」は、前8世紀の南王国で「イザヤ」とほぼ同時期に三代の王に仕えた宮廷預言者で、「サマリアとエルサレムについて幻に見た」こと、つまり滅びつつあった北王国と滅亡の危機に瀕していた南王国の両国関係に関する任務を担い、またその助言をしていたと考えられる。本書には、同時期に同じ宮廷で預言者として活動した「イザヤ」の預言句とほぼ同じ文言の預言句が見られ(4:1~3=イザヤ 2:2~4)、両者には神学思想にも共通点が見られる。しかしながら、「イザヤ」(「第一イザヤ」)の預言が、基本的に南王国ダビデ王朝の永続を約束する内容であり、王側近の立場を推認させるのに対して、「ミカ」の預言は、南王国(ユダ=エルサレム)が保護国として頼りながら一枚岩になれずにアッシリアへの抵抗を維持できずに滅びの道を突き進む北王国(イスラエル=サマリア)の現実を批判するのみならず、北王国の保護を振り切って自らアッシリアに従属し利己的な強欲に走る南王国支配層の現実を嘆くものともなっている。このような「ミカ」の視点は、「ホセア」や「アモス」の影響が指摘される。また、「ミカ」が「モレシエトの人」(1:1)と呼ばれていることとも関係するのかもしれない。「イザヤ」が「アモツの子」と呼ばれ、エルサレム神殿祭司の正統な家系に属していたであろうことが示唆されるのに対して、「モレシエトの人」と呼ばれる「ミカ」は、神殿祭司の出身ではなかった可能性が考えられる。同様のことが、「アモス書」の「アモス」や「ナホム書」の「ナホム」にも考えられる。もしかすると、「ミカ」は、「アモス」のように北王国内で情宣活動をする職員だったかもしれない。

・1~3節は、「イザヤ書」にほぼ同じ文言の預言句が見られる(上述)。2節「神の家」は「ベイト・エロヘイ」であるが、「ヤコブ」と結びつけられており、「ベテル(ベト・エル)」を示唆する表現。「ベテル」は、後期北王国で国家聖所と位置づけられていた。「ベテル」の祭司に対する批判は、「エレミヤ書」、「ホセア書」、「アモス書」に見られ、北王国滅亡の責任を問うものとなっている。「ベテル」系祭司集団と「エルサレム」系祭司集団で国境を越えた権力闘争があったとも考えられる。

他方で、「ミカ書」は、「ベテル」を示唆する「ヤコブ」を強く批判することには控え目で、むしろ同情的である。

使徒書日課(ヘブライ12章)

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典中「パウロ書簡集」の直後に置かれた書簡文書。末尾の様式から書簡として作成された文書であることが明らかであるが、書簡冒頭にあるべき差出人・宛先人の明示や挨拶が失われている。これが事故によって失われたのか、意図的に削除されたのかは、確定的なことは言えないが、後者の可能性は高いと考えられる。すなわち、新約諸文書は「使徒的文書」であることを基準として正典に編入されてきた歴史があり、「使徒性」に疑義が生じる差出人の著作であることが不都合とみなされた可能性が考えられる。しかしながら、主流教会は、この文書その内容から「使徒的文書」として認知し、正典に編入してきた。「ヘブライ人への手紙」という書名は、本書簡そのものに由来する呼称ではなく、その内容からユダヤ人(ヘブライ人)を説得するために作成されたと考えた古代教父が通称として付したもの。

・一般に、本書簡文書は、新約正典中で唯一、旧約聖書に基礎づけられた「贖罪神学」を提示し得た文書とみなされている。すなわち、主イエスを旧約で提示される「大祭司」の天的理想と位置づけ、旧約の大祭司が年に一度の「民のための贖罪」祭儀(贖罪日)を執行してきたことに基づいて、主イエスを天的大祭司として最終一度きりの「民のための贖罪」祭儀を自ら犠牲の小羊となって執り行われ、完全な贖罪を完成された方として提示している。

・日課箇所は、本書簡文書が展開してきた「贖罪神学」を踏まえて、天の最終的な救いを望みながら地上で生涯を終えた代々の信仰者の末に現れられた主イエスを信仰の創始者かつ完成者として模範とするキリスト者の生き方として、地上的な困難や苦難を鍛錬として受け入れながら、地上のものに捕らわれず天的な目的地を目指して生きるべきことを勧めている。その目的地は、「天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、天の登録されている長子たちの集会、」など天的な表現で示されているが、その概念自体は「シオンの山、生ける神の都」という表現で示されるような、旧約で神の御前に近づくことができるとされた場のことである。日課箇所を展開するイメージも、「出エジプト記」が「シナイ契約」(出 19~24章)として描くような「神の山」のそれであり、かつて民が自ら神の言葉を聞くことを畏れ、また神もそれを禁じられたのに対して、今は、キリストの「贖罪」によってその恐れも禁止も取り除かれ、神の御前に接近することが許されている、ということを確認している。

・23節「集会」は「エクレーシア」で、多くの用例で「教会」と訳される語。「シュナゴゲー(シナゴグ)」の同義語として用いられる例もあるが、多くの用例では、キリスト者の「集会・集団」を指すために用いられている。

福音書日課(ヨハネ 4 章より)

・日課箇所は、「サマリアの女の逸話」として知られる説話物語の前半部分。「ヤコブの井戸」の傍らで主イエスと「サマリアの女」の間で交わされた対話編として物語られている。日課箇所に続く物語後半では、主イエスのもとに戻ってきた弟子たちの反応や、「サマリアの女」が自分の村に戻って人々に告げた結果、主イエスを信じる者たちが現れたことが物語られている。

・「サマリア人」は、「ユダヤ人」と共通の宗教的ルーツを持つ集団とされながら、当時相互の交際を絶っていた人々。バビロン捕囚後の時代にエルサレムで再建された神殿と並ぶようにゲリジム山に建てられていた神殿を聖所としていたが、前 2 世紀にエルサレム神殿を拠点とする祭司一族がシリアからの独立戦争を起こし、ローマ(共和制)の支持を得てハスモン王朝の王国を成立させていく過程で、ゲリジム山の神殿が破壊され、エルサレム神殿に帰属する「ユダヤ人」とゲリジム神殿に帰属する「サマリア人」の断絶が起こったとされる。「サマリア人」の末裔は今日までゲリジム山に生き続けており、独自に伝承してきた「律法(トーラー)」（学術的には「サマリア五書」と呼ばれる）に基づいた祭事・祭儀を続けている。

・主イエス一行とサマリア人との関係については、「ルカ福音書」が伝えているように、ほとんど接点を持つことがなかったと考えられる(ルカ 9:51~56)。しかし、「ルカ」は、「善いサマリア人のたとえ」を伝えたり、「使徒言行録」でフィリポやペトロ、ヨハネによるサマリア伝道を伝えており(使徒 8 章)、使徒たちの時代の伝道で一定の成果を上げたと考えられている。日課箇所も、ユダヤ人である主イエスがサマリアの女と会話することさえ異例であったということを前提に展開しており、この説話物語によって主イエスの積極的なサマリア伝道を伝えようとしているわけではないと考えられるが、「ルカ」同様、使徒たちの教会におけるサマリア伝道を予示させる使信を含んだものとなっている。

・「サマリアの女」との対話で出てくる「生きた水」や「永遠の命に至る水」という表象は、この後の本福音書の展開の中で繰り返し取り上げられるもの。

来週の誕生日 (6 月 16 日~22 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-352「来たれ全能の主」(= I 67)は、18 世紀英国メソジスト運動の中でイギリス国歌の曲に合わせて替え歌として歌われるようになった作者不詳の歌詞。曲は、この歌詞のためにイタリアの音楽家ジャルディーニが作曲。

・21-287「ナザレの村里」(= I 272)は、19 世紀英国教会司祭ガーニーの歌詞を自由に翻案してものが『讃美歌』(1931 年版)に採用され歌われてきたが、『讃美歌 21』では大幅に歌詞を改訂している。曲は、

18 世紀ロシアの教会音楽家ボルトニャンスキーの作曲だが、ロシア正教会の讃美歌ではない。

・21-432「重荷を負う者」(= I 238 詞)は、19 世紀スコットランド国教会、後に自由教会の牧師ボナーがヨハネ 1:16 を題に付して発表した歌詞。イエスの語りかけと信仰者の応答という構成。『21』で全面的に改訳。曲は、英国教会讃美歌集等に倣って I 120 と同じ曲が組み合わせられている。

21-352「来たれ、全能の主」

Come, Thou Almighty King

1. Come, thou almighty King, / help us thy name to sing, / help us to praise! / Father all glorious, / o'er all victorious, / come and reign over us, Ancient of Days!
2. Come, thou incarnate Word, / gird on thy mighty sword, / our prayer attend! / Come, and thy people bless, / and give thy word success; / Spirit of holiness, on us descend!
3. Come, holy Comforter, / thy sacred witness bear / in this glad hour. / Thou who almighty art, / now rule in every heart, / and ne'er from us depart, Spirit of power!
4. To thee, great One in Three, / eternal praises be, / hence, evermore. / Thy sovereign majesty / may we in glory see, / and to eternity love and adore!

21-287「ナザレの村里」

We saw Thee not when Thou didst come

1. We saw thee not when thou didst come / To this poor world of sin and death; / Nor yet beheld thy cottage home, / In that despised Nazareth; / But we believe thy footsteps trod / Its streets and plains, thou Son of God; / But we believe thy footsteps trod / Its streets and plains, thou Son of God.
2. We saw thee not when lifted high / Amid that wild and savage crew; / Nor heard we that imploring cry, / "Forgive, they know not what they do!" / But we believe the deed was done, / That shook the earth and veiled the sun; / But we believe the deed was done, / That shook the earth and veiled the sun.
3. We gazed not in the open tomb / Where once thy mangled body lay; / Nor saw thee in that "upper room," / Nor met thee on the open way; / But we believe that angels said, / "Why seek the living with the dead?" / But we believe that angels said, / "Why seek the living with the dead?"
4. We walked not with the chosen few / Who saw thee from the earth ascend; / Who raised to heaven their wondering view, / Then low to earth all prostrate bend; / But we believe that human eyes / Beheld that journey to the skies; / But we believe that human eyes / Beheld that journey to the skies.

21-432「重荷を負う者」

I Heard the Voice of Jesus Say

1. I heard the voice of Jesus say, / "Come unto me and rest; / lay down, O weary one, lay down / your head upon my breast." / I came to Jesus as I was, / so weary, worn, and sad; / I found him in a resting place, / and he has made me glad.
2. I heard the voice of Jesus say, / "Behold, I freely give / the living water, thirsty one; / stoop down and drink and live." / I came to Jesus, and I drank / of that life-giving stream; / my thirst was quenched, my soul revived, / and now I live in him.
3. I heard the voice of Jesus say, / "I am this dark world's light; / look unto me, your morn shall rise, / and all your day be bright." / I looked to Jesus, and I found / in him my star, my sun; / and in that light of life I'll walk / till trav'ling days are done.